

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01323

研究課題名(和文) 高句麗・渤海を東部ユーラシア史に位置づけるための基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Study on putting Koguryo and Bohai from the perspective of East Eurasian History

研究代表者

古畑 徹 (FURUHATA, Toru)

金沢大学・国際学系・教授

研究者番号：80199439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,100,000円

研究成果の概要(和文)：高句麗・渤海と『東部ユーラシア』諸地域との関係について、実証的な研究が大きく進展した。特に重要なのは、高句麗・渤海の領域であった中国東北部が、中原王朝の夷狄区分において「東夷」から「北狄」に移行するのが7世紀末～730年代の間であったこと、その背景に靺鞨・渤海と契丹の密接な関係が次第に知られ、720年代に契丹対策の要が渤海であるとの認識が確立したことがあった点を明らかにしたことである。

また、高句麗王系系図の成立過程、渤海王都の変遷過程、渤海の北方領域の範囲、唐の河北海運使の成立と契丹・渤海との関係、渤海瓦当の制作方法などで新見解が示され、高句麗・渤海の実像やその周辺との関係がより鮮明となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最終目的は、中国・韓国等による、高句麗・渤海史をめぐる「歴史の争奪」を克服することにある。これは一国史という近代国民国家の枠組で歴史を見る考え方に起因するため、その克服には国民国家の枠を超えた広域史のなかで高句麗・渤海を見る方法が有効であり、かつ高句麗・渤海を含む広域史も多様で、それらを組み合わせる必要があった。ただ、この試みはまだ端緒に就いたばかりであり、とりわけ東部ユーラシア史の枠組での基礎研究の成果が乏しかった。本研究はその乏しい部分に集中的にアプローチしたもので、その成果は新たな高句麗・渤海史像構築の上で重要な位置を占め、「歴史の争奪」克服を一步進めるものである。

研究成果の概要(英文)：Empirical research on the relationship between Koguryo/Balhae and the various regions of "Eastern Eurasia" has made significant progress. Of particular importance are the following two points.

(1) The area category of Northeast China, which was the territory of Koguryo and Balhae, shifted from "eastern barbarians" to "northern barbarians" in the barbarian classification of the Chinese dynasties between the end of the 7th century and the 730s. (2) The close relationship between Mohekk and Balhae and the Qidan gradually became known, and in the 720s it was recognized that Balhae was the key to countering the Qidan.

In addition, new views were presented on the formation process of the Koguryo royal genealogy, the transition process of the Balhae royal capital, the range of Balhae's northern territory, the relationship between the establishment of Hebei Shipping Agency and Khitan/Bohai, and the production method of Balhae tile fittings, which clarified the actual image of Koguryo and Balhae.

研究分野：歴史学

キーワード：高句麗 渤海 東部ユーラシア史 東北アジア 歴史の争奪

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 中国東北地方～朝鮮半島の一帯とその周辺は「東北アジア」とも呼ばれ、古代においては中国王朝に「東夷」と呼ばれた諸種族が活動した一つの歴史的空間であった。この「東北アジア」は、北部に興って全体に領域を広げた高句麗(前 37? ~ 後 668)、その後継を称して北部を支配した渤海(698 ~ 926)までは一つの歴史的空間であったが、その後北部に興った勢力は南部と分かれて中国と一体化する道を歩み、南部だけが独自の歴史的空間として残った。その結果、「東北アジア」北部の大半は中国東北部、南部は朝鮮(韓国・北朝鮮)という現在の状況が出現した。こうした「東北アジア」の歴史的特色が、現在、「東北アジア」北部にあった過去の国家=高句麗・渤海を、現在の国家=中国・朝鮮(韓国・北朝鮮)がそれぞれに自国史上に排他的に位置付けて奪い合う「歴史の争奪」という現象を生み出した。

(2) そもそも中国・朝鮮間の現在の国境を跨いで存在した高句麗・渤海は、その地に居住する高句麗人と各種種族によって構成された多民族国家であり、その遺民も「東北アジア」の様々な民族の源流の一部となっている。そのため高句麗・渤海は本来、現在の国民国家の枠組みを前提とした一国史観的歴史理解ではその実像に迫りえない存在である。にもかかわらず、現実には高句麗・渤海の現在の国家・民族への「帰属問題」が存在し、中国と北朝鮮の間では 1960 年代から、中国と韓国の間では 1980 年代からそれが議論されてきた。これは次第にエスカレートし、2003 ~ 4 年には、韓国において中国が韓国古代史上の国家高句麗(及び渤海)を中国史に位置付けて「強奪」しようとしているという反発が広がり、中韓の外交問題にまで発展した。これをその後の展開を含めて「高句麗歴史論争」(韓国では「歴史戦争」と呼ぶが、この状況は中国・韓国における高句麗史・渤海史の解釈枠組みの固定化につながり、研究はその枠組みから逸脱しにくくなった。また、研究の進展に本来必要な関係国家の研究者間の協力が困難な状況が生じており、このことは高句麗史・渤海史ばかりでなく、「東北アジア」地域の前近代・近代をとおした歴史研究のさらなる発展を阻む可能性も大きく、その克服は喫緊の課題である。

(3) 過去の国家を現在の国民国家同士が自国の歴史に排他的に位置づけるべく奪い合う「歴史の争奪」現象は、世界各地で起こり得るし、現実には起こっているが、これほど典型的な例は珍しい。それだけに、高句麗・渤海をめぐる「歴史の争奪」をいかに克服するかという問題意識は、歴史学全体にとって重要な問題意識である。

(4) こうした「東北アジア」史の学術的状況と問題意識を背景に、本研究課題の核心をなす二つの学術的「問い」が生まれた。それが(A)「東北アジア」の古代国家である高句麗・渤海は「東部ユーラシア」の歴史のなかにどのように位置づけられるか、及びその問いを考える前段階としてまず検討しなければならない(B)「高句麗・渤海は「東部ユーラシア」諸地域の歴史上の諸国家とどのように関係し、それらにおいてどのように認識されていたか」である。つまり、一国史観的な「歴史の争奪」の克服でまず考え得るのは広域的な枠組みから歴史を見る方法であり、それが近年の「東北アジア」史という枠組みで高句麗・渤海を理解しようとする流れとなった。しかし、この枠組みでは先述のような歴史的経緯は描けても、そこから当然派生する「渤海以後に「東北アジア」北部に興った国家はなぜ中国と一体化する道を選んだのか」という問いに答えるのは難しい。そこで注意されるのが、従来看過されていた、渤海以後に「東北アジア」北部に興った国家は中国だけでなくモンゴリアとも一体化していたという事実である。このことは、2010 年頃から主張され、最近注目されるようになった、北中国とモンゴリアを一つの中核地域として、マンチュリア(「東北アジア」北部)をも含めて一体の歴史的空間として捉えようとする「東部ユーラシア史」と高句麗・渤海を関連付けることの有効性を想起させる。そこで「東北アジア」より大きな広域枠組みである「東部ユーラシア」へと視座を移し、そこから高句麗・渤海を見ることによって、一国史観的な枠組み理解とは異なる新たな高句麗・渤海の歴史的な位置づけを試みようというのが、問い(A)である。ただ、そうした試みは、仮説的な先行研究が若干あるだけで、位置づけの基礎となる作業はほとんど行われていない。そこで、それを試みようというのが、問い(B)である。

### 2. 研究の目的

本研究は、1 で問題意識として示した高句麗史・渤海史をめぐる「歴史の争奪」の克服を最終的な目的とする。これは学術上の問題を超越する側面もあり、一朝一夕では解決できないが、「争奪」の対象となっている諸事象、たとえば高句麗・渤海と新羅の同族意識の有無などの個別課題は、純粋に学術的観点から解答を出し得るものである。そのため、争点を洗い出し、実証的にその解答を追究することがまず必要で、既にこうした基礎作業には一定の蓄積がある。しかし、これらの蓄積だけではなかなか「歴史の争奪」の克服には行き着かない。そこで着想を転換し、争いの当事者に限定された地域枠組み(中国東北・朝鮮、あるいは「東北アジア」)を超えた、より大きな広域史の視座から、高句麗・渤海の歴史的な影響や重要性を洗い直し、高句麗・渤海に対する新たな歴史的な位置づけを行って、従来とは異なる高句麗・渤海像を提示することを、本

研究の目的として設定した。これが成功すれば、高句麗・渤海を中国（東北）史・朝鮮史に位置づける歴史理解を相対化し、それだけの占有物ではないことを明確にでき、「歴史の争奪」を克服する糸口が見えてくると考える。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究で明らかにしようとしていることは、(1)高句麗・渤海と「東部ユーラシア」諸地域、とりわけ看過されてきたモンゴリアとの関係を具体的・実証的に明らかにすることであり、それを踏まえて、(2)7世紀以降、現代に至るまでの「東部ユーラシア」の諸地域において、高句麗や渤海がどのように認識されてきたかを、可能な限り具体的に示すことである。そして、(3)上述の諸作業を通じて判明した事実や認識を総合して、東部ユーラシア全体にわたる高句麗・渤海の歴史的な影響や重要性を明確にすることである。ここまでできれば、従来とは異なる高句麗・渤海像の提示という目的をほぼ果たせたことになるが、(1)(2)が明らかにならないと(3)を明確にすることは難しいので、本研究課題3年間の到達目標は(1)(2)を明らかにすることである。

(2) 方法としては、

本研究課題のメンバーを、東部ユーラシア、とりわけモンゴリアと高句麗・渤海との具体的な関係を実証的に検討する班と、東部ユーラシア諸地域における高句麗・渤海認識の洗い出しを行う班とに大別し、そのうちの最も基礎的な作業は中堅～若手の研究者が、それらの成果を統合して新たな歴史像を検討する作業を主にベテランの研究者が担う体制を構築する。また、全体の統括は代表者と代表者が所属する金沢大学の研究者を中核とする統括チームによって行う

本研究を遂行するためには、高句麗・渤海に直接関係する中国・韓国・北朝鮮及びロシアにおける研究状況を正確に把握する必要がある。そのため、代表者及び研究分担者は、本研究課題の遂行期間内にそれら関係諸国で研究状況の調査を行う。このうち、北朝鮮は渡航自体が困難だが、中国吉林省朝鮮族自治州にある延辺大学の高句麗・渤海研究中心が北朝鮮の研究状況についての情報を収集・把握している。また、延辺大学は、高句麗・渤海は中国史・朝鮮史の両方に属するものとする「一史両用」論を初めて提唱し、中国における「歴史の争奪」克服の最前線に位置付く。そのため、3年間継続的に延辺大学高句麗・渤海研究中心との連携・交流を行っていく。

メンバーそれぞれの研究成果は年に2回の研究会に持ち寄って議論する。1回目は打ち合わせを兼ねた本研究メンバーによる研究会で、各メンバーの報告を踏まえて、統括チームを中心に、東部ユーラシア全体にわたる高句麗・渤海の歴史的な影響や重要性を明らかにするための議論を行う。2回目は延辺大学などの外国の研究者や他分野の研究者も交えた研究会(ワークショップ)とし、本研究のその時点での成果に対する広い視野からの意見交換を行う。最終年度には、中国・韓国等から研究者を招聘してオープンな国際シンポジウムを開き、本課題の成果を国内外に発信するとともに、対立する立場の研究者が公平に議論できる場も提供し、その成果がどれだけ「歴史の争奪」の克服に有効かを検証する。なお、国際シンポジウム会場は金沢の予定である。高句麗・渤海との日本側交流拠点だったことや日本海側の中核都市であることから、対岸の歴史への地域一般の関心が高く、過去の類似シンポでは全国から人が集まった実績もあるので、発信場所として最適と判断した。

(3) 上記のように方法を設定したが、2020年度からのコロナ禍と、国際情勢の悪化によって、研究方法の「関係各国の研究状況の正確な情報収集のための海外調査及び研究交流」及び研究方法の「海外の研究者を招聘しての研究会・国際シンポジウムの開催」は実施が困難になった。そこで、それに代わる方法として採用したのが「過去の研究情報の集約」とりわけ「戦前の研究によって得られた各種史料・資料の見直し作業」である。地道な作業となることもあって、従来手つかずであった史料・資料も少なくないので、この方法からも3年間で到達目標まで至れる可能性があり、かつ新たな展開へと広がる可能性があるかと判断した。

### 4. 研究成果

(1) まず到達目標(1)「高句麗・渤海と『東部ユーラシア』諸地域、とりわけ看過されてきたモンゴリアとの関係を具体的・実証的に明らかにすること」についての最大の成果は、古畑徹「靺鞨・渤海はなぜ「北狄」なのか」(『東方学』140、2020年)である。これでは、夷狄区分についての中国中原王朝の公式見解は、唐代のうちに靺鞨・渤海を「東夷」から「北狄」へと変化するのだが、その変化は7世紀末～730年代に起こったもので、『唐六典』に明記されたことで固定化されたこと、その変化の原因が、靺鞨・渤海と契丹の密接な関係が次第に唐朝で認識されるようになり、それを背景に720年代に契丹対策の要が渤海であるとの認識が確立したことにあること、を明らかにした。これにより、靺鞨・渤海とモンゴリアとの関係がかなり具体的に明らかになるとともに、東北アジア北部のマンチュリアと呼ばれる地域が中国のなかに組み込まれていく過程を具体的にたどることのできる糸口が見つかった。なお、これは到達目標(2)「7世紀以降、現代に至るまでの「東部ユーラシア」の諸地域において、高句麗や渤海がどのように認識されてきたかを、可能な限り具体的に示すこと」にもつながる成果である。

(2) 渤海とモンゴリアの具体的な関係については、本研究課題の代表者によって、既に730年代の唐渤海紛争をめぐる、渤海と遊牧勢力である突厥・契丹との関係についての緻密な一連の実証研究があった。その後、それらへの批判もあったので、古畑徹『渤海国と東アジア』（汲古書院、2021）の出版に当たって、過去の研究の補足を行い、渤海と突厥・契丹との有機的な連関関係をより明瞭にした。これは研究成果(1)を補完する成果である。

(3) 2021年度末に、その時点までの到達目標(1)(2)の両方に関する研究成果を、古畑徹編『高句麗・渤海史の射程』（汲古書院、2022）にまとめて刊行した。本書に収録された到達目標(1)に関する重要な成果としては、研究者ごとに異なる「東部ユーラシア」の概念を整理し、その概念の使用法についての提言を行ったこと、渤海とその北方世界との関係を考古学の面から明らかにし、渤海の北方における勢力圏を明瞭にしたこと、唐の幽州節度使が兼領した河北海運使の成立と、契丹・渤海と唐との紛争とが密接に関係している点を明らかにしたこと、が挙げられる。到達目標(2)に関する重要な成果としては、高句麗遺民墓誌の研究動向を整理して、唐や現代の関係各国における高句麗遺民認識を明らかにするとともに、この研究のさらなる可能性を指摘したことが挙げられる。このほかにも(2)に関連する成果として、現在の中国と日本における渤海の瓦罫に対する認識と方法論の相違、高句麗王系系図の成立過程、日本の渤海史研究の現在および将来の方向性、内藤湖南の『満蒙叢書』と金毓黻の『遼海叢書』のつながり、などが明らかにされたことや、近代日本の高句麗認識をより明瞭にする新史料、金毓黻『渤海国志長編要刪』の日本の図書館における収蔵状況などが紹介されたことを挙げることができる。

(4) 2022年度末には、本研究課題のまとめとして、シンポジウム「高句麗・渤海史の射程」が開かれた。到達目標(1)(2)に関連する重要な成果としては、渤海が、大氏による統治の正統性と関連させて、唐に対しては靺鞨の王、日本に対しては高句麗の後継者という二つの顔を使い分けていた点を明らかにしたこと、高句麗王系系図の成立過程がより精緻化したこと、契丹文における渤海国・東丹国の用例が紹介されたことが挙げられる。特に「東部ユーラシア」諸地域やその周辺地域が渤海に対して多様な認識を持っていた原因とも考えられ、本研究の最終目的に近づくものとして重要な意味を持つ。また、コロナ禍や国際情勢の悪化で海外の関係諸国との交流ができなくなったために、それに代わる研究方法として採用した「戦前の研究によって得られた各種史料・資料の見直し作業」についても、戦前の八連城関連資料の現状とその利用可能性、戦前の写真資料についての紹介とその利用可能性などについて具体的な成果があり、今までほとんど顧みられなかった戦前の研究の遺産を再調査することで、今後の新たな研究の発展が期待できることが明瞭となった。

(5) 上記の研究成果4点は3年間のトピックを中心に、到達目標との関係を示しながら、それぞれの成果を整理したものである。上記以外にも、各研究分担者・研究協力者によって、様々な基礎研究が進められた。とりわけ進展したものに、「東部ユーラシア」の辺境であるロシア沿海地方周辺の渤海時代以降の歴史が、考古学を中心に次第に明らかになってきていることが挙げられる。この地域と日本列島とのかかわりについても実証研究が積み重ねられてきており、ロシア沿海地方周辺の歴史的展開のなかに高句麗・渤海を位置付け直すことも可能な状況ができつつある。

(6) 高句麗・渤海自体についての基礎研究では、研究成果(3)(4)とも重なる高句麗王系系図の成立過程や高句麗遺民研究、及び考古学を中心にした渤海の王都関係の研究に大きな進展が見られた。とりわけ王都の変遷については、最新の発掘成果をもとに、旧国の場所や顕州王都の比定、八連城の役割などについての新見解が示されており、今後、あらためて国際的な議論へと発展することが予想される。

#### < 引用文献 >

- 古畑徹、靺鞨・渤海はなぜ「北狄」なのか、東方学、140、2020、41-58
- 古畑徹、『渤海国と東アジア』、汲古書院、2021、640
- 古畑徹（編著）、井上直樹、植田喜兵成智、中澤寛将、中村亜希子、村井恭子、渡辺健哉、『高句麗・渤海史の射程』、汲古書院、2022、252
- 小嶋芳孝、ロシア沿海地方における渤海の領域について、纏向学研究、10、2022、659-666
- 中村和之、モンゴル帝国時代のサハリン島の史料に見える方位のずれについて、函館大学論究、54-1、2022、1-14
- 小嶋芳孝、瓦当文様の変遷から見た渤海王都の検討、唐代史研究、25、2022、37-66

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計48件（うち査読付論文 20件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 16件）

1. 著者名 古畑徹、ほか	4. 巻 17
2. 論文標題 暁烏文庫『大東輿地図索引』に挟み込まれていた 暁烏敏宛の葉書について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学資料館紀要	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00065775	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古畑徹	4. 巻 885
2. 論文標題 〔書評と紹介〕 清水信行・鈴木靖民編『渤海の古城と国際交流』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 87-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古市大輔	4. 巻 14
2. 論文標題 清代後期の遼陽劉氏とその家系 19世紀前半におけるその婚姻・科挙受験からみた	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1~18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00066979	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉永匡史	4. 巻 14
2. 論文標題 日唐の將軍号に関する小考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1~10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00066981	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浜田久美子	4. 巻 185
2. 論文標題 行基と菩提僊那の和歌贈答 「国風文化」の形成過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史観	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 毛利 英介	4. 巻 54
2. 論文標題 『紹興甲寅通和録』から見た劉斉をめぐる国際関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 253-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32286/00023736	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村和之	4. 巻 70
2. 論文標題 アイヌの北方交易と蝦夷錦という中国製の絹織物	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東國史学	6. 最初と最後の頁 115-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.22912/dgsh.2021..70.115	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村 和之	4. 巻 53-1
2. 論文標題 13、14 世紀のアムール河下流域の寒冷化についての事例提供	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 函館大学論究	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18896/00000365	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村和之	4. 巻 91
2. 論文標題 李志恒『漂舟録』にみえる植物名について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村亜希子、ほか	4. 巻 3
2. 論文標題 「瓦様」と瓦範 東大寺式軒丸瓦における同紋瓦・同瓦の再検討 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈文研論叢	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村亜希子、ほか	4. 巻 3
2. 論文標題 変形忍冬唐草文軒平瓦6647Cの再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈文研論叢	6. 最初と最後の頁 133-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤羽目匡由	4. 巻 258
2. 論文標題 新羅東北境における炭項閤門の築造年代と「泉井郡」の称	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 197-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤羽目匡由	4. 巻 882
2. 論文標題 [書評と紹介] 鈴木靖民著『古代の日本と東アジア』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 85-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤羽目匡由	4. 巻 24
2. 論文標題 則天武后末期の東方情勢に関する一問題 渤海における則天武后の影響と残像	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 57-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤羽目匡由	4. 巻 130-5
2. 論文標題 2020年の歴史学界 回顧と展望 東アジア (朝鮮古代)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 248-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上直樹	4. 巻 73-1
2. 論文標題 北朝鮮における楽浪郡研究 郡治所在地をめぐる議論を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 井上直樹	4. 巻 74
2. 論文標題 稲葉君山の檀君神話認識 否定的評価と肯定的解釈の背後	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 韓日関係史研究	6. 最初と最後の頁 43-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古畑徹	4. 巻 140
2. 論文標題 鞆鞆・渤海はなぜ「北狄」なのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 41 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤羽目匡由	4. 巻 23
2. 論文標題 杜牧作「新羅王子金元弘等授太常寺少卿監丞簿制」をめぐるいくつかの問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上直樹	4. 巻 72
2. 論文標題 石窟庵と近代日本 曾禰荒助韓国統監・寺内正毅朝鮮総督を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告(人文篇)	6. 最初と最後の頁 113-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ., (中村和之、小田寛貴)	4. 巻 32
2. 論文標題 - (加速器質量分析計が北東アジアの中世史に光を当てる)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 (サハリン州博物館報告)	6. 最初と最後の頁 87-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 . (中村和之)	4. 巻 32
2. 論文標題 《 》 記』にみえるアレクサンドロフスク・サハリンスキーの土城) (黒田清隆『環遊日	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 (サハリン州博物館報告)	6. 最初と最後の頁 74 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村 和之	4. 巻 18
2. 論文標題 『諏方大明神画詞』の「唐子」をめぐる試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際日本学 = INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES	6. 最初と最後の頁 186(1)-168(19)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15002/00023759	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古畑徹	4. 巻 23
2. 論文標題 2019年度夏期シンポジウム「東部ユーラシア論を考える」主旨説明	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛根靖裕, 古松崇志, 松川節, 小野浩, 齊藤茂雄, 高井龍, 伴真一朗, 毛利英介	4. 巻 51
2. 論文標題 コスロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡G110rについて : 『大元通制』ウイグル字モンゴル語訳の発見	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本モンゴル学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 毛利英介	4. 巻 23
2. 論文標題 山根報告へのコメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ACRI research paper series	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 毛利英介	4. 巻 30
2. 論文標題 10~13世紀東アジア (Asia) 国際関係史研究に関する随想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中國史学	6. 最初と最後の頁 131-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Gakuhari Takashi, Nakagome Shigeki, Rasmussen Simon ほか	4. 巻 3
2. 論文標題 Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Communications Biology	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s42003-020-01162-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古畑徹、村上慧馬	4. 巻 18
2. 論文標題 大谷勝眞と暁烏敏 : 「暁烏文庫『大東輿地図索引』に挟み込まれていた暁烏敏宛の葉書について」補遺	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢大学資料館紀要	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00069251	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 10
2. 論文標題 ロシア沿海地方における渤海の領域について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 纏向学研究	6. 最初と最後の頁 659-666
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 25
2. 論文標題 瓦当文様の変遷から見た渤海王都の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 37-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KOJIMA Yoshitaka	4. 巻 124
2. 論文標題 An examination of the capitals of Po-hai based on research on changes in antefix motifs	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 37-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 13
2. 論文標題 クラスキノ城跡出土石帯の再検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同志社大学考古学シリーズ（考古学と文化史）	6. 最初と最後の頁 533-542
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上直樹	4. 巻 25
2. 論文標題 新羅神宮神主考：新羅の聖地祭祀の基礎的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都府立大学文化遺産学叢書（聖地霊場の成立についての分野横断的研究）	6. 最初と最後の頁 209-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ueda, Kiheinarichika	4. 巻 27-2
2. 論文標題 The Genealogy in the Koguryo Diaspora's Epitaph	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Korean History	6. 最初と最後の頁 31-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 赤羽目匡由	4. 巻 18
2. 論文標題 「開仙寺石燈記」の基礎的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 53-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村亜希子	4. 巻 25
2. 論文標題 書評：清水信行・鈴木靖民編『渤海の古城と国際交流』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 287-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村和之	4. 巻 54-1
2. 論文標題 モンゴル帝国時代のサハリン島の史料に見える方位のずれについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 函館大学論究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村和之、ほか	4. 巻 85
2. 論文標題 寛永通寶および永楽通寶の分類に対する階層および非階層クラスター分析の適用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化財科学	6. 最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村和之、ほか	4. 巻 33
2. 論文標題 銭を指標とした伝世タマサイの編年試案	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 市立函館博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村和之	4. 巻 19
2. 論文標題 函館市北方民族資料館企画展示「北のシルクロードと蝦夷錦 - 炭素14年代測定で明かされた蝦夷錦の制作年代」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道民族学	6. 最初と最後の頁 86-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤寛将	4. 巻 30
2. 論文標題 青森と東アジア	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青森県考古学 (青森の考古学)	6. 最初と最後の頁 124-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺健哉、ほか	4. 巻 22
2. 論文標題 南宋・洪邁『夷堅志』の史的研究活用に向けて (五)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪公立大学東洋史論叢	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田久美子	4. 巻 139
2. 論文標題 古代日本の対外交流と美濃あしぎぬ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 郷土研究岐阜	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 毛利英介	4. 巻 55
2. 論文標題 文瀾閣本『三朝北盟会編』初探	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 269-284
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 毛利英介	4. 巻 277
2. 論文標題 『中興礼書』から見た高宗弔祭使関連儀礼の諸相	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学 (宋代とは何か)	6. 最初と最後の頁 238-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 毛利英介	4. 巻 14
2. 論文標題 『靖康稗史』の出現について－『謝家福書信集』所収史料の紹介	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所研究叢書 (文書・出土・石刻史料が語るユーラシアの歴史と文化)	6. 最初と最後の頁 121-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古畑徹	4. 巻 95
2. 論文標題 外交から考える金沢説 - 渤海との交流記録に根拠 大野川河口に接待施設かー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北國文化 (特集: 立国1200年 加賀国府の謎)	6. 最初と最後の頁 18-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



〔学会発表〕 計50件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海上京城の造営と瓦せん
3. 学会等名 第6回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浜田久美子
2. 発表標題 渤海の「高麗」国号と冊封体制
3. 学会等名 第6回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 毛利英介
2. 発表標題 『靖康稗史』の「出現」について 『謝家福書信集』所収史料の紹介
3. 学会等名 第6回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上直樹
2. 発表標題 高句麗始祖廟祭祀考 高句麗始祖廟祭祀記事の批判的検討と高句麗王系
3. 学会等名 第6回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 斉藤優が調査した図們江（豆満江）下流域の渤海遺跡
3. 学会等名 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター主催「第一回 渤海考古学シンポジウム」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 瓦当による渤海王都変遷の検討
3. 学会等名 唐代史研究会2021年度夏期シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 古代日本海域における人の移動 - 渤海・日本航路を中心に -
3. 学会等名 日本考古学協会2021年度金沢大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 渤海の都城 - 建国から上京までの変遷
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所公開研究会「東アジア都城史研究の今」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 足立拓朗
2. 発表標題 青銅製棒状槍先の型式編年について
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第26回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 クラスキノ城跡からみた渤海の土器生産
3. 学会等名 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター主催「第一回 渤海考古学シンポジウム」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 Interaction and Trade in the Ancient Northern Japan and the Okhotsk Sea Region
3. 学会等名 ソウル大学国史学科BK21事業団・韓国ユーラシア文明研究会主催 "Interaction and Conflict in the East Sea Region: From Prehistoric Times to the Middle Ages" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 東京帝国大学退官後の常盤大定の活動をめぐって
3. 学会等名 国際シンポジウム 近代日本の中国学の光と影 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 西古城と八連城における出土瓦の同范関係
3. 学会等名 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター主催「第一回 渤海考古学シンポジウム」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子ほか
2. 発表標題 三次元計測データで比較する同紋瓦と同范瓦 - 東大寺式軒丸瓦の検討 -
3. 学会等名 日本文化財科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海都城における宮殿の瓦と寺の瓦
3. 学会等名 東アジア比較都城史研究会 令和3年度第3回共同研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村井恭子
2. 発表標題 吐谷渾史研究の現状：新たな考古遺物の発見を中心に
3. 学会等名 第57回野尻湖クリルタイ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤羽目匡由
2. 発表標題 「開仙寺石燈記」の外的性格に関する二、三の問題
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館・慶北大学校人文学院HK+事業団 主催、日韓合同研究会「古代日本と韓国の文字文化と書写材料」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上直樹
2. 発表標題 新羅中代の宗廟と寺院 恵恭王王代の宗廟改編と奉恩寺
3. 学会等名 韓国慶北大学校人文大学主催「人文国際学術大会」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤羽目匡由
2. 発表標題 則天武后末期の東方情勢に関する一問題 渤海における則天武后の影響と残像
3. 学会等名 2020年度唐代史研究会秋期シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 近年の高句麗遺民墓誌に関する研究動向
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 赤羽目匡由
2. 発表標題 渤海の地方制度の概観 近年の研究成果を踏まえて
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村井恭子
2. 発表標題 唐代契丹の反乱と河北海運使の成立
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 『満蒙叢書』から『遼海叢書』へ 内藤湖南と金毓黻との「対話」
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海瓦せん研究の諸問題 なぜ、考古学者は瓦を研究するのかー
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 考古学からみた渤海とその周辺
3. 学会等名 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 牛根靖裕, 古松崇志, 松川節, 小野浩, 齊藤茂雄, 高井龍, 伴真一朗, 毛利英介
2. 発表標題 コズロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡 G110r について 『大元通制』ウイグル字モンゴル語訳の発見
3. 学会等名 日本モンゴル学会2020年度秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 西古城と八連城における出土瓦の同范関係
3. 学会等名 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター第1回渤海考古学シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古畑徹
2. 発表標題 渤海国の高氏と高句麗遺民統合
3. 学会等名 シンポジウム「高句麗・渤海史の射程」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 日本人研究者らによる八連城調査と遺跡資料
3. 学会等名 シンポジウム「高句麗・渤海史の射程」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上直樹
2. 発表標題 高句麗始祖母信仰と高句麗王系
3. 学会等名 シンポジウム「高句麗・渤海史の射程」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 澤本光弘
2. 発表標題 1935年、金毓黻と竹島卓一の集安高句麗調査
3. 学会等名 シンポジウム「高句麗・渤海史の射程」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 毛利英介
2. 発表標題 契丹文資料における渤海国・東丹国の用例の紹介 - 遼代の渤海認識の検討のために
3. 学会等名 シンポジウム「高句麗・渤海史の射程」
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 古畑徹
2. 発表標題 渤海使として来日した渤海国の高氏
3. 学会等名 第9回高麗郡建郡歴史シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 遣渤海使が訪ねた渤海の王都
3. 学会等名 第9回高麗郡建郡歴史シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 寺家遺跡から探る古代の気多神社
3. 学会等名 石川考古学研究会11月例会・平安後期のシャコデ廃寺を探る
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 古代能登・気多神社の祭祀 - 寺家遺跡の調査から
3. 学会等名 東アジア古代都城と都市網の宗教空間に関する 総合的・比較史的研究 - 2022年国際会議（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上直樹
2. 発表標題 新羅神宮神主考
3. 学会等名 朝鮮学会第73回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上直樹
2. 発表標題 百濟官位成立考
3. 学会等名 2022年度九州史学大会朝鮮学部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上直樹
2. 発表標題 新羅王都における宗廟と寺院 - 恵恭王代の宗廟改編と奉恩寺 -
3. 学会等名 シンポジウム「アフロ・ユーラシア大陸における都市と国家の歴史」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 文武王碑にみえる新羅の国際認識
3. 学会等名 第23回遼金西夏史研究会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 植田喜兵成智
2. 発表標題 670年代の新羅と唐の対立と疎通 薛仁貴・文武王書状の分析を中心にー
3. 学会等名 2022人文国際学術週間国際学術大会「疎通の人文学」(Humanities of Communication)(主催：慶北大学校)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 足立拓朗
2. 発表標題 南レヴァント、ガッスル文化の土器と乳製品利用
3. 学会等名 日本オリエント学会第64回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 基于三維測量数据的磚图案復原研究
3. 学会等名 中日青年考古論壇(主催：蘭州大学歴史文化学院・蘭州大学資源環境学院)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村和之、ほか
2. 発表標題 オホーツク文化の青銅製帯金具の複製と研究
3. 学会等名 草原考古研究会2022年6月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村和之
2. 発表標題 蝦夷錦と北東アジアのシルクロード
3. 学会等名 東北亜細亜文化学会2022年秋季聯合國際大會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 モンゴル時代の「胸背」
3. 学会等名 第58回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 元代の三都（大都・上都・中都）とその機能 「移動する王権」をめぐる予備的考察
3. 学会等名 都城制研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 金・元時代の都市と生活
3. 学会等名 人文研アカデミー「草原と中華のあいだ 北方王朝（遼・金・元）の興起とユーラシア東方（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浜田久美子
2. 発表標題 古代日本の対外交流と美濃
3. 学会等名 岐阜県郷土資料研究協議会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 毛利英介
2. 発表標題 『靖康稗史』偽書説—本文の検討を踏まえて
3. 学会等名 第1回KU-ORCAS研究例会（第2回東西学術研究所研究例会）ユーラシア歴史研究班
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計27件

1. 著者名 古畑徹(編著), 井上直樹, 植田喜兵成智, 中澤寛将, 中村亜希子, 村井恭子, 渡辺健哉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 252
3. 書名 高句麗・渤海史の射程	

1. 著者名 宋基豪教授停年記念論叢刊行委員会編、小宮秀陵、井上直樹、ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ZININZIN	5. 総ページ数 780
3. 書名 宋基豪教授停年記念論叢：韓国古代史を展望する多様な視線：文献，文字，物質	

1. 著者名 浜田久美子ほか編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八木書店出版部	5. 総ページ数 488
3. 書名 古代日本対外交流史事典	

1. 著者名 渡辺健哉ほか編、中村和之、ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 322
3. 書名 元朝の歴史	

1. 著者名 池谷和信編、中村和之、ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 288
3. 書名 アイヌのビーズ-美と祈りの二万年-	

1. 著者名 大貫静夫編、中村亜希子、ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 326
3. 書名 中国考古学論叢：古代東アジア社会への多角的アプローチ	

1. 著者名 吉澤誠一郎監修、赤羽目匡由、ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学	

1. 著者名 井上 直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 512
3. 書名 高句麗の史的展開過程と東アジア	

1. 著者名 古畑徹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 640
3. 書名 渤海国と東アジア	

1. 著者名 鄭京日・王志剛ほか編（赤羽目匡由、植田喜兵成智、井上直樹ほか）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Hyeon	5. 総ページ数 551
3. 書名 境界を越えた高句麗・渤海史研究	

1. 著者名 清水信行・鈴木靖民編（浜田久美子、赤羽目匡由、中澤寛将、小嶋芳孝ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 496
3. 書名 渤海の古城と国際交流	

1. 著者名 国立文化財機構奈良文化財研究所（中村亜希子ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国立文化財機構奈良文化財研究所	5. 総ページ数 622
3. 書名 鞆義黄冶窯発掘調査報告	

1. 著者名 池上悟先生古稀記念会（中澤寛将ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 761
3. 書名 芙蓉峰の考古学	

1. 著者名 オリオン・クラウタウ編（渡辺健哉ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 370
3. 書名 村上専精と日本近代仏教	



1. 著者名 平田茂樹・余蔚編（渡辺健哉ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 349
3. 書名 史料与場域	

1. 著者名 小口雅史編（吉永匡史ほか）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 410
3. 書名 古代東アジア史料論	

1. 著者名 木本好信編（吉永匡史ほか）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 852
3. 書名 古代史論聚	

1. 著者名 大津透編（吉永匡史ほか）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 日本古代律令制と中国文明	

1. 著者名 櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉編（渡辺健哉、中村和之ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 322
3. 書名 元朝の歴史	

1. 著者名 大貫静夫編（中村亜希子ほか）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 326
3. 書名 中国考古学論叢	

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 370
3. 書名 古代環日本海地域の交流史	

1. 著者名 李成市先生退職記念論集編集委員会編（井上直樹・澤本光弘・植田喜兵成智ほか）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 432
3. 書名 東アジアにおける朝鮮史の展望	

1. 著者名 姜尚中監修（井上直樹・村井恭子ほか）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 728
3. 書名 アジア人物史 2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア	

1. 著者名 Seiichi Nakamura, Takuro Adachi and Masahiro Ogawa (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University	5. 総ページ数 184
3. 書名 Japanese Contributions to the Studies of Mesoamerican Civilizations	

1. 著者名 岡美穂子編（中村和之ほか）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 247
3. 書名 つなぐ世界史1 古代・中世	

1. 著者名 渡辺健哉、ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 306
3. 書名 岩波講座世界歴史第7巻 東アジアの展開 8～14世紀	

1. 著者名 渡辺健哉ほか編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 清文社	5. 総ページ数 478
3. 書名 周縁的社会集団と近代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小嶋 芳孝 (KOJIMA Yoshitaka) (10410367)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・客員教授  (13301)	
研究分担者	毛利 英介 (MORI Eisuke) (10633662)	関西大学・東西学術研究所・研究員  (34416)	
研究分担者	吉永 匡史 (YOSHINAGA Masafumi) (20705298)	金沢大学・歴史言語文化学系・准教授  (13301)	
研究分担者	古市 大輔 (FURUICHI Daisuke) (40293328)	金沢大学・歴史言語文化学系・教授  (13301)	
研究分担者	小林 信介 (KOBAYASHI Shinsuke) (50422655)	金沢大学・経済学経営学系・教授  (13301)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村井 恭子 (MURAI Kyoko) (50569291)	神戸大学・人文学研究科・准教授  (14501)	
研究分担者	植田 喜兵成智 (UEDA Kiheinarichika) (50804407)	学習院大学・付置研究所・研究員  (32606)	
研究分担者	渡辺 健哉 (WATANABE Kenya) (60419984)	大阪公立大学・大学院文学研究科・教授  (24405)	
研究分担者	赤羽目 匡由 (AKABAME Masayoshi) (60598853)	東京都立大学・人文科学研究科・准教授  (22604)	
研究分担者	覚張 隆史 (GAKUHARI Takashi) (70749530)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・助教  (13301)	
研究分担者	中村 和之 (NAKAMURA Kazuyuki) (80342434)	函館大学・商学部・教授  (30104)	
研究分担者	井上 直樹 (INOUE Naoki) (80381929)	京都府立大学・文学部・准教授  (24302)	
研究分担者	足立 拓朗 (ADACHI Takuro) (90276006)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・教授  (13301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 亜希子  (NAKAMURA Akiko)  (60600799)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・客員研究員    (84604)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中澤 寛将  (NAKAZAWA Hiromasa)		
研究協力者	浜田 久美子  (HAMADA Kumiko)		
研究協力者	小宮 秀陵  (KOMIYA Hidetaka)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関